

漆による創作活動と技術・技能 Creation Activity by Lacquer and Technology・Skill

繁昌 孝二
Koji Hanjyou

1. はじめに

漆とは、「漆の木の樹液」から精製された天然樹脂塗料である。それを各種器胎に塗り重ね、装飾を施した漆作品は、日本の代表的な工芸品の一つである。また漆は、様々な優れた性質を持っており、塗料としての用途だけでなく、接着剤や形自体をつくり出す成形材料的な用途にも使用される。筆者は、このような性質の漆を活用し、年2回全国規模の公募展への出品をはじめ、30年以上創作活動を行ってきた。今回は創作活動を通して感じる立体造形の考え方や技術・技能について報告する。

2. 漆について

2.1. 漆の特徴

漆の主な特徴は、次の通りである^[1]。



図1 漆掻きした漆の木^[2]

- (1) 自然や人に優しい天然材料である。
- (2) 優雅な質感や光沢をもっている。
- (3) ふっくら感、深み感、しっとり感がある。
- (4) 工程の工夫などにより、各種素材に対して十分な付着性が得られる。近年、ガラス質にも十分付着させることができる。
- (5) 耐水性、耐酸性、耐アルカリ性にも優れている
- (6) 漆液に触れるとかぶれやすい。ウルシオールがアレルギーとなって皮膚蛋白に作用する^[1]。
- (7) 基本的には耐候性に劣るが、近年では耐候性漆も開発されている^{[3],[4]}

2.2. 漆の種類

漆の木から採取された漆は、荒味漆という。それをろ過したもののが生漆、なやし（攪拌）やくろめ（加熱脱水）の精製作業を行って透漆や黒漆が作られる。黒漆を作る際にはごく微量の鉄粉もしくは水酸化鉄を混ぜてくろめる。また、透漆に各色の顔料を練って様々な色漆を作る。

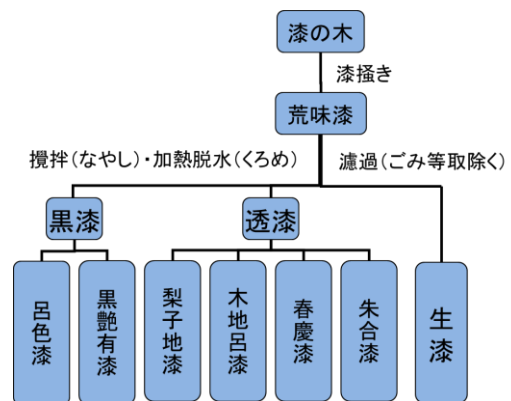


図2 漆の種類

2.3. 本堅地塗りについて

漆塗りの技法の中で最も代表的な塗り方は、本堅地（ほんかたち）塗りといい、多くの工程を行って堅牢な仕上げとする。その工程例は、次のようになる。

- | | |
|--------------|-------------|
| (01)こくそ彫り | (16)切粉さび研ぎ |
| (02)木固め | (17)切粉さび固め |
| (03)こくそ掻い込み | (18)砥の粉さび付け |
| (04)引き込み地付け | (19)砥の粉さび研ぎ |
| (05)引き込み地研ぎ | (20)下塗り |
| (06)布着せ | (21)下塗り研ぎ |
| (07)布目揃え | (22)中塗り |
| (08)布目むら直し | (23)中塗り研ぎ |
| (09)布目すり | (24)上塗り |
| (10)地の粉さび下付け | (25)上塗り研ぎ |
| (11)地の粉さび上付け | (26)砥の粉胴摺り |
| (12)地の粉さび研ぎ | (27)摺り漆 |

- (13)地の粉さび固め
- (14)切粉さび下付け
- (15)切粉上付け
- (28)磨き
- (29)摺り漆と磨きをさらに4～5日程度繰り返す。



図3 本堅地塗り仕上げのお椀

2.4. 拭き漆仕上げについて

拭き漆仕上げは、漆塗り技法の中では最も明快な塗装法であるが、木材の素材感を最も活かした仕上がりとなり、人気のある仕上げ方法の一つである。

丁寧に木材（主に樺などの環孔材）素地を研磨後、生漆を布などですり込む作業を、一般に5～10日間繰り返す。単純な作業であるが、食器をはじめ、家具、インテリア部材などに多く使用される。



図4 拭き漆の作業風景

2.5. 透き漆仕上げについて

木目を活かした仕上げ方法の一つで、褐色透明な木地呂漆や梨地漆などを刷毛塗りして仕上げる方法である。目的に応じて染料等で素地着色を行うと様々な色調に仕上げることが可能である。



図5 透き漆の作品例^[5]

2.6. 加飾技法について

次に加飾技法の主なものについて述べる。

- (1) 漆絵
色漆を使用して絵や文様を描く技法。
- (2) 箔絵
金、銀等の箔を貼って絵や紋様を描く技法。

- (3) 蒔絵
漆で紋様を描いた上に、金粉、銀粉等を蒔き付ける技法。主な蒔絵技法として、平蒔絵、高蒔絵及び研出蒔絵がある。

① 平蒔絵（ひらまきえ）

弁柄と漆を練った絵漆で、塗面に文様を描き、それが乾燥する前に、金、銀等の細粉を蒔き、余分な粉を取り除き、乾燥後摺り漆等で固めてから磨き上げる。

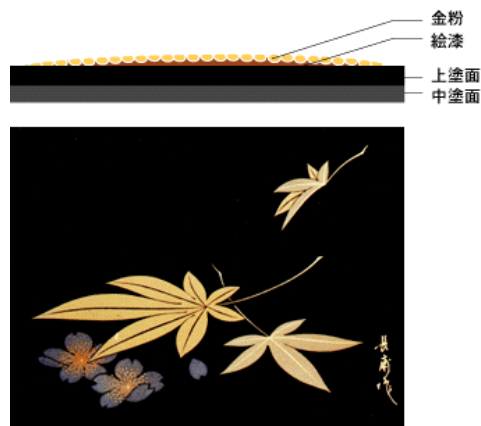


図6 平蒔絵の技法^[2]

② 高蒔絵（たかまきえ）

漆、炭粉、錆などを使い、文様部分を高く盛り上げ、その上に絵漆で文様を描き、金粉等を蒔いて平蒔絵と同様にみがき仕上げる。

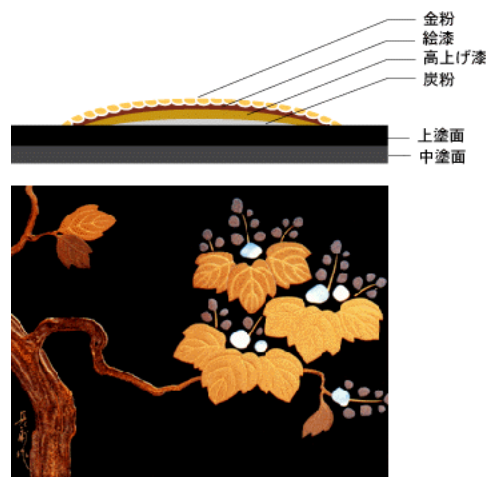


図7 高蒔絵の技法^[2]

③ 研出蒔絵（とぎだしまきえ）

中塗り面に漆で文様を描き、比較的粗い蒔絵粉を蒔いた後に、上塗りで全体を塗込み、乾燥した後、炭で文様部分を研ぎ出し、最後に磨いて艶を出す。

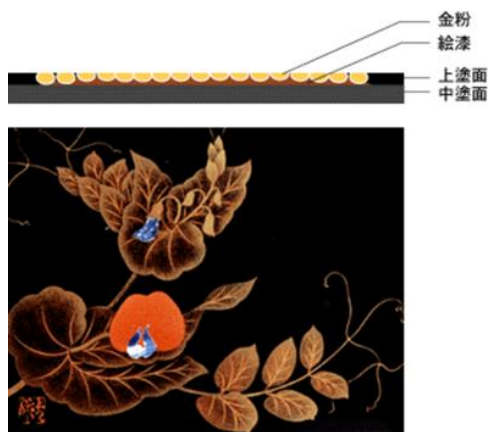


図8 研出蒔絵の技法^[2]

- (4) 沈金
塗面を沈金刀で彫り、漆を擦り込み、凹部に金箔や金粉を入れる技法。
- (5) 平文
金銀などの薄板を文様に切って漆面に貼り、漆で塗り埋めてから、その部分を研ぎ出すなどして文様を表す。
- (6) 蒔醬（きんま）
沈金と同じように塗膜面を刀で彫り、その凹部に色漆を充填する技法。
- (7) 存星
蒔醬と同じように塗膜面を刀で彫るが、その凹部に色漆を充填せず仕上げる技法。
- (8) 螺鈿
あわび貝、夜光貝、ニュージーランド貝などの貝を薄い板状に削り出し、文様に合わせて貼り付けたり、細かく粒子に砕いて蒔くなどする技法。
- (9) 卵殻貼り
白漆の代用表現として鶉や鶏の卵殻を、漆膜の表面に貼って加飾する技法。

2.7. 変わり塗りについて

変わり塗りは、津軽の唐塗りや七々子塗り等のように、漆の性質を応用した様々な装飾的塗装方法である。

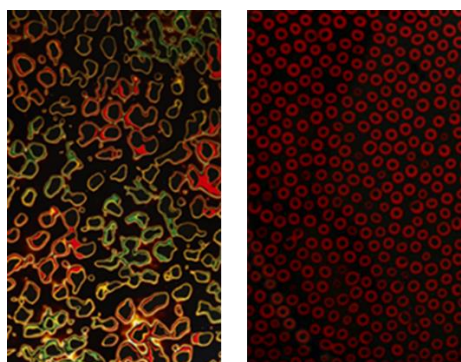


図9 変わり塗り例^[5]

江戸時代には“鞆塗り”といわれ、刀の鞆塗りを専業

とする人もいた。変わり塗りは、漆塗りの一色だけのもに対して色彩の変化があったり、凹凸があったり、あるいは他の材料を併用したものなどある。

- (1) 絞漆(卵白などで漆液の粘稠度を増したもの)を用いたもの。刷毛目塗り、木目塗り、津軽塗り、唐塗りなど。
- (2) 植物の種子や葉を用いたもの。七々子塗り、錦塗り、虫食い塗りなど。
- (3) 布や紙を用いたもの。布目塗り、一閑張りなど。
- (4) 塗り方を工夫したもの。根来塗り、曙塗り、ぼかし塗りなど。
- (5) その他。石目塗り、卵殻貼り、錆漆を用いたもの、型を用いたもの、墨流しを応用したものなど多くの技法がある。

2.8. 乾漆技法について

数多くの漆木地の制作技法がある中で、有機的で自由なフォルムを制作するのに適しているのは、乾漆技法である。乾漆技法とは、一般に、油性粘土や発泡体で原型をつくり、その原型を石膏型に写し、その後その石膏型に、麻布(寒冷紗)を糊漆(米糊や麦糊+生漆)と錆漆(砥の粉や地の粉+水+生漆)で貼り重ねて器胎を作る方法である。古来から興福寺の阿修羅像をはじめ、仏像彫刻の制作にも使用されてきた技法である。



図10 乾漆技法で作られた阿修羅像^[6]

筆者は、原型づくりにおいて油性粘土の代わりに、カーモデリングなどの工業デザイン分野で使用されているインダストリアルクレイを使用している。より理想的な形や肌合いを作るためである。また、素地制作においてフォルムが最終決定するまでは合成樹脂を併用し、FRP (Fiber-Reinforced Plastics) や CFRP (Carbon Fiber-Reinforced Plastics) で制作し、その後乾漆技法の工程に従い、麻布(寒冷紗)、糊漆及び砥の粉さびを使用して素地を作っていくこともある。

乾漆技法で漆素地をつくる場合、より天然素材や本来の乾漆技法にこだわるなら、純粋な乾漆技法で行うべき

と考える。ただし、この場合は制作途中でのフォルムの修正がききにくいので、アイデア展開や具体的設計などのプロセスをより丁寧に行っておく必要がある。一方、立体造形の追求に極力こだわるならば、合成樹脂との併用すなわちFRPやCFRPとの併用が有効である。この場合作りながらも引続き造形を煮詰め、多少の修正が可能であることが最大のメリットである。ただし、FRP素地の上に直接漆を塗ると付着性や仕上がりの質感が十分でないため、二液形ポリウレタン樹脂塗料など、FRP素地と漆膜の双方と層間付着性など相性の良い塗料を間に挟んでから、寒冷紗、糊漆、さび漆を使用してさらに肉付けや面出しを行って漆素地とするとよい。

3. 工芸の領域

工芸とは、純粋美術と工業技術の間に位置する領域と考える。そして、同じ工芸でも制作スタンスの違いにより、概して、工芸美術、伝統工芸、民芸、工芸デザインに分けることができる。

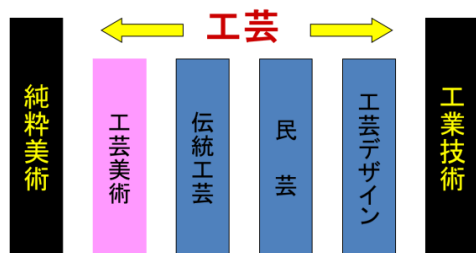


図 11 工芸の領域

3.1. 工芸美術

工芸の分野の中で最も純粋美術寄りの制作スタンスで、工芸素材の天然材料の素材感や手仕事を大事にしつつ、美の追求、独創性、自己主張に主眼をおく工芸分野である。日展の作品は、この領域である。立体物としては、用途ある器類から用途持たないオブジェ等、また平面的なものは、絵画的パネル、屏風などがあり幅広い。



図 12 工芸美術分野の作品例^{[7][8]}

3.2. 伝統工芸

工芸の分野の中で最も純伝統の継承、高度の技術・技能の追求に主眼をおく工芸分野である。人間国宝

(重要無形文化財保持者)を頂点にした伝統工芸展の作品は、この領域である。基本的には、用途のある製品の一点もの制作である。



図 13 伝統工芸分野の作品例^[9]

3.3. 民芸

一般的には、伝統産業の工芸品であり普段使いの大衆的工芸品である。その存在は、他の工芸品と同様に高価格の傾向がある。



図 14 民芸分野の作品例^[5]

3.4. 工芸デザイン

今日の日本人の生活様式や消費者ニーズを踏まえ、新しい製品開発に取り組む工芸分野である。日本クラフト展などで新しい提案の漆製品を見ることができ。今後いっそう若者や女性に使ってもらえるような漆塗りの新商品開発などが重要である。



図 15 クラフトデザイン分野の作品例^[7]

4. 創作活動の意義

筆者が公募展に出品するようになったきっかけは、塗装科指導員からデザイン科指導員に担当が変わるに当たって、少しでも職業訓練指導員としての役割を全うしたいがための自己研鑽の手段としての選択だった。活動を始めて30年以上たった現在、改めて創作活動の意義を述べるなら、主に次のようなことである。

- ① 造形感覚や美的感覚を養う。
- ② 漆塗りをはじめ、塗装全般の技術・技能を高める。
- ③ 評価される側（作る側）と評価する側（職業訓練指導員等の指導者）の両方の気持ちを理解する。
- ④ 無から生み出すことの、喜びと苦しみを味わう。
- ⑤ ものづくりの価値を知る。
- ⑥ 自然の素晴らしさや大切さを再認識する。
- ⑦ 出展活動を通じて、漆の魅力を PR する。

5. 制作にあたってのアイデア発想法

造形活動やデザインワークで、最も重要な段階はアイデア展開である。単なるひらめきのみで制作するには数的に限界もあり、独創的で新たな作品はなかなか生まれない。筆者が取り組むアイデア展開のための発想法として、次のようなものがある。

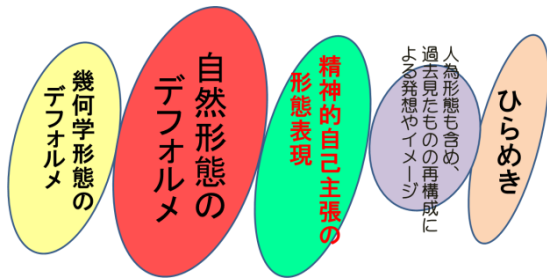


図 16 アイデアの発想法

植物、動物、自然現象等の自然形態の観察をはじめ、幾何学形態や先人達の魅力的造形物の人為形態をよく観察し学ぶことが、発想力や造形力を養うためには重要である。また、作品自体は、制作者自身を表していると言われる。自らの人間性を磨き・高めることが重要である。次に、主な発想法について解説する。

5.1. 幾何学形態を基に

幾何学形態は、数値的に整った美しい形態である。その幾何学形態の魅力を再認識して、デフォルメや自由な組合せで、独創的で新しい形態を生み出す手法として有効である。

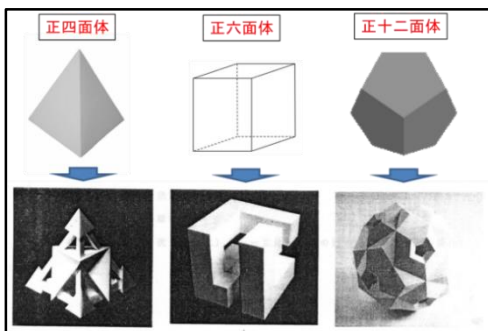


図 17 幾何学形態からの発想法

5.2. 自然形態を基に

工芸活動の根幹は、自然崇拝である。自然の美しさや魅力に目を向けて、そこから自己表現の新しい形態を生み出す方法である。例えば、同じ植物でも全体を見るか、部分を見るかによっても切り口は大きく変わってくる。

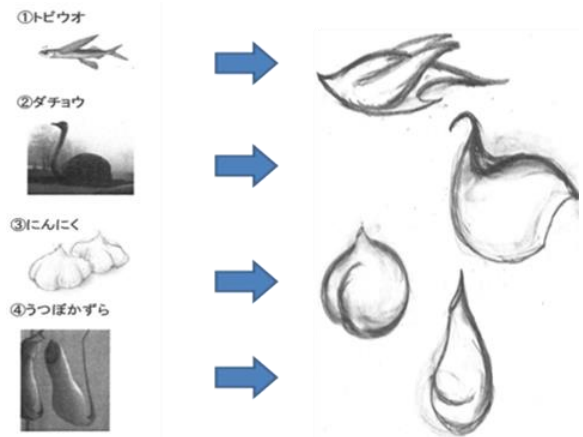


図 18 自然形態からの発想法

5.3. その他のアイデア展開手法

その他、次のようなアイデア展開手法が一般的である。

- (1) 精神的自己主張
自分の主義主張や価値観、あるいはその時の強い想いを作品で表現。
- (2) 人為形態からのアレンジ
ある用途の形から別の用途の形に、アレンジしつつ転用。
- (3) 言葉からの発想
例えば、鳥一般からイメージする形や架空の鳥のイメージを新たな形態に表現する。その他、風、浮遊など様々な言葉からのイメージを具現化。
- (4) 手の動くままからの造形発想
有機曲線の自由な形を手の動きに任せて表現する。
- (5) 夢うつ状態からの発想
催眠法的に眠い状態で浮かんでくる発想を書きとめ、それをきっかけに新たな発想を行う。

6. 美的形式原理について

美しいものを表現するための形式として、基本的な考え方は、統一率（規則性）と変化率（動き）の適度なバランスを図ることである。統一が強すぎるとまとまりやすが単調となり、物足りない感が強い。変化率が強すぎるとまとまり感が弱く、ごちゃごちゃして見える。美的形式原理については、古代エジプト・ギリシャ以来、多くの提示がなされており、シンメトリー、バランス、プロポーシオン、リズム、グラデーシオン、コントラストなどあるが、さらに一歩深く認識した上で、統一率と

変化率の適度なバランスを図ることが重要である。

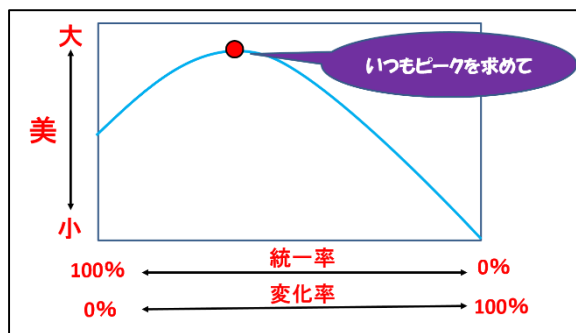


図 19 美の形式

7. 創作作品と解説

職業訓練大学校（現：職業能力開発総合大学校）の3年次に初めて漆工技術を学び、漆の魅力に取り付かれた一人である。平成2年開校の大阪職業訓練短期大学校産業デザイン科の担当をきっかけに、漆を使用しての立体造形として創作活動に取り組むことを始めた。

以下、これまで制作してきた作品の中の一部を紹介させて頂くと共に、制作意図や制作上の技術・技能について、若干述べることにする。

7.1. 作品1『ツイスト』

寸法：H46×W41×D34 cm

第12回日本新工芸展（1990）初入選

制作意図：直截的な形状の明快さとねじれた曲面の美しさを表現。幾何学形態に目を向けての発想。



図 20 『ツイスト』

7.2. 作品2『春苞』

寸法：H50×W42×D40 cm

第14回日本新工芸展（1992）読売新聞社賞

制作意図：座禅草のユニークな形をデフォルメ・抽象化。自然形態を意識し始めての発想。



図 21 『春苞』

7.3. 作品3『萌芽』

寸法：H55×W47×D40 cm

第17回日本新工芸展（1995年）入選

制作意図：球根から新芽が育つ生命力を表現。大きなボディと小さく引き締まった口元の対比がポイント。この作品は朱漆のみで仕上げた。

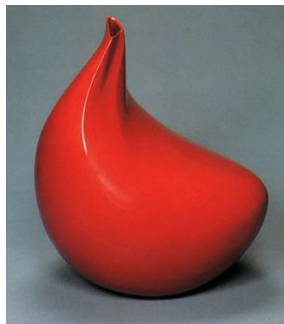


図 22 『萌芽』

7.4. 作品4『潤沢』

寸法：H35×W37×D43 cm

第33回日展（2001）入選

制作意図：果実の実が生命力を持って内側から膨らみ、張りのあるフォルムの表現。



図 23 『潤沢』

7.5. 作品5『灼爍（しゃくしゃく）』

寸法：H43×W49×D40 cm

第25回日本新工芸展（2003）無鑑査

制作意図：炎のように燃えたぎる想いを黒漆と朱漆のぼかし塗りで表現。ぼかし塗り技法を学ぶ。



図 24 『灼爍（しゃくしゃく）』

た造形と、コンセプトがうまくかみ合い面白い立体造形ができた作品の一つ。



図 27 『ともに響く』

7.6. 作品 6『潤映』

寸法：H50×W54×D43 cm

第 26 回日本新工芸展（2004）会員佳作賞

制作意図：空間を持ったシンプルな曲面形状と夕焼けを感じさせるような潤いのある色彩と質感を中心に。また塊と空間の関係を意識。



図 25 『潤映』

7.9. 作品 9『秘める』

寸法：H48×W45×D45 cm

第 33 回日本新工芸展（2011）無鑑査

制作意図：同じ形態要素を 3 つ持った構成の面白さとその 3 つ面のつながりの在り方を追求。



図 28 『秘める』

7.7. 作品 7『輪廻（りんね）』

寸法：H41×W41×D39 cm

第 38 回日展（2006）入選

制作意図：自然界のものは、めぐりめぐって循環するものという考えからの抽象表現。



図 26 『輪廻（りんね）』

7.10. 作品 10『麗しく』

寸法：H38×W45×D30 cm

第 44 回日展（2012）入選

制作意図：鳥一般のイメージによる造形で、鳥の曲線美とふくよかさ。そしてほのぼのとした安堵な雰囲気表現。



図 29 『麗しく』

7.8. 作品 8『ともに響く』

寸法：H50×W54×D43 cm

第 42 回日展（2010）特選

制作意図：人は一人で強く生きていきながらも、他者に支えながら成り立っている様を抽象表現。床面に対して足の 6 点中 2 点を浮かし、重心を上にし

7.11. 作品 11『引き寄せる』

寸法：H63×W43×D48 cm

改組第1回日展（2014）入選

制作意図：雄の孔雀が雌の気を引くために、自分の美しさを見せつけている時の姿を立体造形としてシンプルに表現。



図 30 『引き寄せる』

7.12. 作品 12『FREEDOM』

寸法：H55×W40×D35 cm

第39回日本新工芸展（2017）東京都知事賞

制作意図：制約のない自由な想いを求めているの表現。



図 31 『FREEDOM』

7.13. 作品 13『時空』

寸法：H53×W51×D44 cm

第40回日本新工芸展（2018）文部科学大臣賞

制作意図：四次元空間の中で、新たな変化を求め、一歩を踏み出す想い。



図 32 『時空』

7.14. 作品 14『奮い立つ』

寸法：H60×W51×D40 cm

改組第6回日展（2019）入選

制作意図：新しい時代に向けて、新しい風が吹くことを期待しての立体造形。



図 33 『奮い立つ』

8. 創作活動と技術・技能

工芸において独創的な創作作品を作るためには、作りたい作品を表現するための技術・技能無しには達成できない。漆による立体造形に必要な技術・技能には、次のような要素があり、今後更なる精進が必要である。

- (1) 発想力（着眼力、想像力等）
- (2) 立体造形力（造形感覚・・・美しい形を起こす力）
- (3) 原型制作技術（彫塑力、モデリング技術）
- (4) 素地制作技術（乾漆技術、FRP技術、木工技術）
- (5) 面出し技術（へら付け技能、研磨技能、面確認力）
- (6) 刷毛塗り技術（刷毛塗り技能、刷毛管理技術）
- (7) 加飾技術（平面構成力、色彩感覚、表現技法等）
- (8) みがき技術（研磨力、みがき技能、摺り漆技能）

9. 漆塗り作業と職業訓練との関係性

漆塗り作業と職業訓練の関係性について、次に述べる。

- (1) 漆塗り作業は、日本における塗装技術の原点であると共に、工程一つ一つの技法や技術・技能は、他の塗装作業（金属塗装、木工塗装、建築塗装）の模範となる技法や工程が多い。
- (2) 漆塗りには、多くの加飾技法や模様があり、建材や工業製品の模様デザインなどに繋がる。
- (3) 訓練施設における塗装を学ぶ受講者にとって、一年訓練や二年訓練の中で、漆塗り作業を一定期間取り組むことで、塗装作業の深さや喜びに出会い、技能習得や職業訓練に良い刺激になる。

- (4) 漆塗りをすることによって日本のしきたりや工芸文化に触れ、職業人として塗装作業に携わることが誇りに思える。
- (5) 工芸を知ること、物を大事にするところをはじめ、自然崇拝や環境保護の感覚が養われる。
- (6) その他、法務局の矯正施設での受刑者の職業訓練課題や矯正作業として、技術・技能習得の他、情操教育などにも効果があり、多くの矯正施設で漆塗り作業が行われている。

職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1
 Koji Hanjyou, Faculty of Human Resources Development,
 Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi, Kodaira,
 Tokyo 187-0035.
 Email: hanjyou@uitech.ac.jp

10. まとめ

- (1) 工芸美術の創作活動は、自然や日常の生活に向き合いながら、自らが無から発想し具体的な設計を行い、天然材料と手工具を使用して、実際にすべての制作プロセスを経て、展示まで行う仕事である。
- (2) 工芸美術における公募展への出品では、技能・技術を高めることを最も基本にしつつ、自らの発想力や造形力を駆使し、自己主張や独創性のある作品を表現すると共に、同時に見る人に一定の共鳴や評価を得なければならない。
- (3) 漆は、日本の代表的な工芸品である。この良き文化や素材を絶やすことなく、多くの人々に好まれ日常において使用してもらえるような存在として引き継いでいかなければならない。そのためのPR活動の一つとして、公募展、グループ展、個展などを通して、創作・出展活動を引き続き行っていく所存である。

Keywords: Natural Material, Natural Form, Art and Crafts, Ideality, Modeling Skill, Self-assertion, Skill and Technology

参考文献

- [1] 永瀬喜助:「漆の本」研成社
- [2] 漆を科学する会ホームページ, <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/urushi/>
- [3] 大藪 泰:「漆の改質および漆をモデルとした酸素反応型塗料の開発」2000/3/
- [4] 寺田 晃、小田 圭昭、大藪 泰、阿佐見 徹:「漆その科学と実技」理工出版社
- [5] 「日本の漆器第2集」:読売新聞社
- [6] 吉田 光邦(監修):「漆器入門」淡交社
- [7] 漆芸家平山敏文ホームページ,
<https://hirayamatoshifumi.yokohama/>
- [8] 「第42回日展作品集」:公益社団法人日展
- [9] 「第63回日本伝統工芸展」:日本伝統工芸運営委員会

(原稿受理 2020/9/23)